

# サロン あべの

## 甦った青春―学びと出会いの4年間

〈サロン・あべの〉7月の出会い

平成16年7月17日(土)〈サロン・あべの〉7月の出会いはこのほど、大坂市立工芸高校(定時制)クラフト科を卒業された大

北清子さんに「甦った青春―学びと出会いの4年間」と題して、お話を伺いました。

〈サロン・あべの〉との出会い

〈サロン・あべの〉に参加してもう10数年になる。最初に参加した頃、自己紹介や感想を言う順番が回ってきて話が出来なかった。その頃は、一人で歩いて来られなかったもので、夫や子どもに付いてきてもらっていた。



パソコン、手話、点字に  
新たな意欲を燃やす大北さん

高校に行くきっかけ

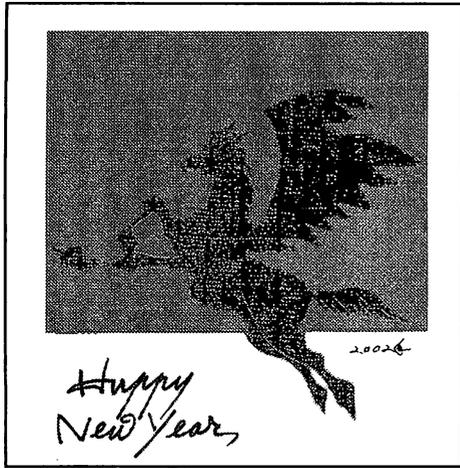
〈サロン・あべの〉の出会いで障害者のスポーツの話を聞いて、

今は電動三輪車いすに乗って外出するようになり、行動範囲が広くなった。区の講座など興味のあるものは、積極的に参加している。

自分も何か出来るかもしれないと思い、見学がてら、長居障害者スポーツセンターへ行った。いろいろなスポーツクラブがあったが、ムービーライフルやアーチェリー教室に入って練習を重ねていくうちに、技術も上がり、試合にも出場するようになって、スポーツの楽しさに触れていった。

アーチェリーで身体障害者の国体に出たとき、雅子様を声をかけていただいたことが、忘れられない思い出になっている。この国体出場で、努力して、練習を続けておれば、叶うことを実感し自信もついた。

その頃、アーチェリークラブに工芸高校に通っている先輩がいて学校の話をよく聞いていた。私は中学校時代、高校進学を希望していたが、体育が出来ないと無理だと言われて、断念し



— 2002年の大北さんの年賀状—

金属箔を天馬に切り、和紙に貼ったもの。天馬の後ろ左足の向こう側に、隠れて見えない右足の部分も切り抜かれています。

た。それで、仕方なく手に職をつ

けて自立することを優先して、服飾専門学校へ4年間通った。

が、自分の心の中では高校に行きたい想いがずっと潜んでいた。

その先輩の話をきっかけに、

工芸高校に相談すると、本人のやる気があれば大丈夫と言われた。自分自身に本気でやる気があるのかどうか自問して、高校

に行く決心をする。

その当時、工芸高校には男子

の車いすトイレしかなかった。

自分が行くことで、女子の車いすトイレを設置するといつても

らったことで、負担に思ったが、もし私自信途中で挫折したとしても、後に続く人のためになる

だろうから、と思い直し、入学の心を固めた。もちろん自身学びたい気持ち

が第一にあったことは言うまでもない。工芸高校は

歴史的価値のある建物に指定されており、むやみに改造や付帯

工事が出来ない

のでエレベーターなどはない。階段は昇降機を使っていた。

校内移動に使用する車いすは学校から貸与され、介

助士を一人つけてもらっ

た。

工芸高校の思い出

4年間の高校生活と私生活双方で、いろいろな事があって大

変だったが、今振り返れば、自分の息子くらいの年齢の人から60

歳代の人まで机を並べて学ぶのだから、最初は不安もあったし、戸惑いもあったが、持ち前の明

確さや気の若さを駆使し、自分

の方から声をかけるようにして、

個性豊かな生徒とも打ち解けて

いった。感化されてピアスも開

けた。文化祭の時は店を出した

り看板を描いたり、主婦業だけでは経験できない経験をたくさん出来た。授業はいつも教壇の

まん前で聞き、成績は5段階査定

の5。実習では慣れない彫金に悪

戦苦闘したことも。充実感いっぱい、楽しいことがいっぱい、まさに「甦る青春」を満喫出来た。

休憩後、在学中に実習で製作

した作品数点もお持ちいただき見せていただきました。また、4年間を通じて精勤賞を、4年生では皆勤賞を受賞したのを見てその意気込みのほどが伺え、そして卒業証書や卒業アルバムなども拝見しました。それらを通じて主婦・母・生徒の三役を立派

にやり逃げられた意志の強さとチャレンジ精神の旺盛さを知りました。

その後、参加者から自己紹介と質問・感想などお聞きしました。

「手が器用で、センスの良さが感じられる」

「人ができる事は自分もできるという思いは大切だ」

「学校に行くことが当たり前になると行ける喜びを感じなくなる。見直す機会がほしい」

「自分も職業リハビリセンターで受講した。同じ恩師の話が懐かしい」

人生は悲しいことや辛いこと、嬉しいこと、いろいろとあるが、自分が行動を起こす事に年齢は関係なく、自らの意思が人生を輝きのあるものに変えていくことを教えていただいた(サロン・あべの)7月の出会いでした。

(参加者11名 山村貴司)

お知らせ

<サロン・あべの>9月の出会い

内容…さわる生花 ~視覚障害者が手でみる生花を楽しんでいます~

お客さま…宇根山千恵子さん

日時…9月18日(土)午後1時~4時

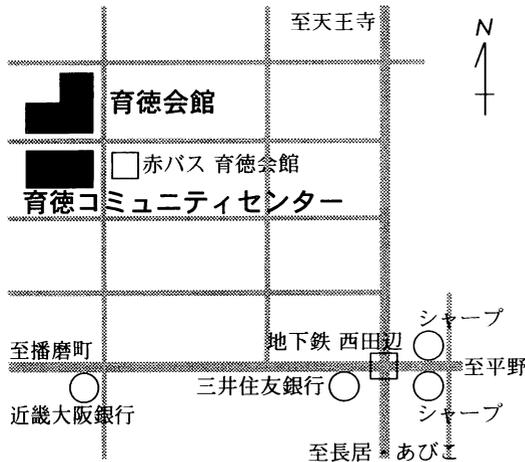
場所…育徳コミュニティセンター2階  
研修室(スロープ・車いすトイレ有)  
大阪市阿倍野区阪南町5-15-28  
TEL 06-6621-1901  
最寄り駅=

地下鉄御堂筋線「西田辺」  
赤バス「育徳会館」下車すぐ

会費…なし

問い合わせ先…

TEL 06-6691-1028 (富田慶子)



さろん亭  
御堂筋チャリティバザーに出店

<サロン・あべの>、阿倍野ひまわり作業所など5グループが御堂筋沿いにあるガスビル<sup>ともしび</sup>周りで開かれる大阪ガス『小さな灯』運動チャリティバザーに参加します。みなさまのお越しをお待ちしています。



内容…御堂筋チャリティバザー  
(小さな灯♥ふれあいフェア)  
さろん亭=サロングッズの販売

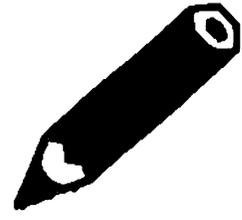
日時…9月16日(木)  
午前10時30~午後6時  
9月17日(金)  
午前9時~午後4時30

場所…大阪ガスビル  
(大阪市中央区平野町4-1-2)  
最寄り駅=地下鉄御堂筋線  
「淀屋橋」から南に7分  
「本町」から北に5分

お願い…平日と夕方の時間帯にかかりますが、どなたか参加していただける方はいらっしゃいませんか。(全て自費)

問い合わせ先…  
TEL 06-6691-1028 (富田慶子)

7



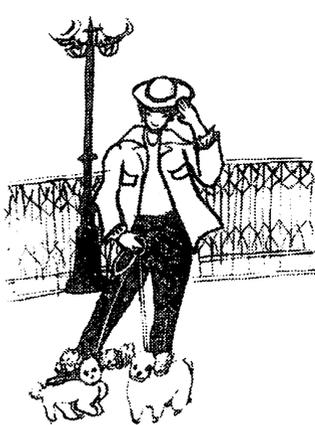
## 邦子、 ..ん歳の手習い。

夫の講演の「求められるボランティア活動とは」を紹介していますが、最後に障害当事者の夫の視点で捉えたボランティア活動についての考えを抜粋して報告させていただきます。

地域ボランティアの個別支援についてですが、「私は重度障害者で、四肢麻痺ですから手が効きません。食事介助、外出介助、トイレ介助が必要です。介護は日常的になります。介護負担の日常性。毎日続くわけです。もう一つは介護の拘束性です。トイレ介助など、夜、夜中でも拘束される場合が多い。介護は日常的で拘束されて、しかも継続的です。

痴呆性老人の家庭などは、調査では5年以上も介護を継続しているという状態です。しかも外に出て、社会参加をするほど介護負担は重くなります。日本の統計データによると介護者は6〜7割が主婦です。ところが主婦は介護負担だけに専念できればいいのですが、家事負担も兼務しています。やはり要介護者が一番助かるのは送迎介助です。「私は電動車いすを使っているアメリカ人を案内して京都に行ったとき、運転ボランティアに清水寺に連れて行ってもらいました。実費だけで、車いすでその他の京都観光ができました。運転、送迎のニーズは高いといえます。送迎ボランティアのおかげで、家族は家にいることができ、その間家族福祉にも貢献できるわけです。

私は事故後3年くらい毎日清拭だけで、お風呂に入っていませんでした。ボランティアを連れて初めてアメリカに旅行した帰りのホテルで、「先生一度お風呂に入れてあげましょうか」といつてくれたのです。それから病みつきになりました。やはりお風呂はいいです。それで、週に2日、この14〜5年間、入浴はボランティアに頼っています。ところ



ありがとう。  
20年

<サロン・あべの>は20年になります。

が案外男性が少なく、仕方がないから男子の学生がいたらそつちをにらんで、「強制はしないけれども入浴ボランティアに来てくれないか」といったら、強制された気分になるわけです。もし断ったら卒業に引つかかると思っ来てくれる。後は卒業生です。一番の問題は越境ボランティアが多いということ。1人だけがすぐ近くのボランティアです。地域のボランティアなら、今日は夜の11時ごろになるとか、9時になると言っ、自分の時間に合わせて来る。それで私は構わな

いので、融通が利くわけです。

最後に、「自立を尊重するまちづくり」のために福祉の環境整備活動が必要です。「電動車いすでどこへでも行けるようなまちづくりが大切です。京都の八幡市の社協のボランティアの人たちが、福祉のまちづくりの点検調査活動をされました。問題点のあるところを全部見て回ったわけです。非常に印象深かったのは、病院で手話のできる人がほとんどいないということです。そういう状況も全部チェックして、病院まで行って手話のボランティアを入れてほしい、などを要望して、すばらしい活動をしておられます。こういう活動は非常に大切だと思います」

以上が、夫の最後の講演の主な内容です。夫は、障害当事者の立場から要介護者が住み慣れた地域で暮らしていくためには、地域の理解とボランティアを通しての援助が必要であると考えていました。私たちは多くのボランティアの方々を支えられ、地域で生活することが出来ました。私にとっては、その援助に加えて、ボランティアの方々を交えて、楽しい会話が出来たことや豊かな人間関係を得られたことが、いい思い出となっています。

私は昨年5月から1カ月に3回、音楽療法を習っている。

先生が最初に「音楽療法とは、音楽を通して身体や心の健康を取りもどすことを言い、第2次世界大戦のあとに米国で帰還兵の治療に用いられ、注目を浴びるようになった」と説明された。

説明が終わると「ゆりかごのうた」「おうま」「肩たたき」「ぞうさん」「母さんのうた」の5曲を先生と一緒に歌った。これらの童謡を歌ったのは何年ぶりのことだろう。私は幼い頃のことを走馬燈のように浮かび、胸がじんと熱くなるのを覚えた。

少し休憩したあとは小太鼓やタンバリンなどの打楽器を使ってリズムを取る練習を

した。先生のピアノの音に合わせてトーン、トーンとたたくと、部屋中に軽やかな音がひびき、自然と身体も動いていた。

リズムの練習が終わると、最後は「今日は何の日？」というのに移った。これはたとえば先生が「5月2日は何の日ですか」と聞かれると、私は「5月2日は八十八夜です」と答えるのである。分からなければ先生に教えてもらう。いずれにしても知識が豊富になり、頭の体操にもなるのでありがたい。

このように1年余りにわたって音楽療法を習ってきたが、最初の頃を思うと私は息が長く続くようになり、言葉も徐々にはっきりと言えるようになってきた。これからもできるだけ続けていきたいと思っている。

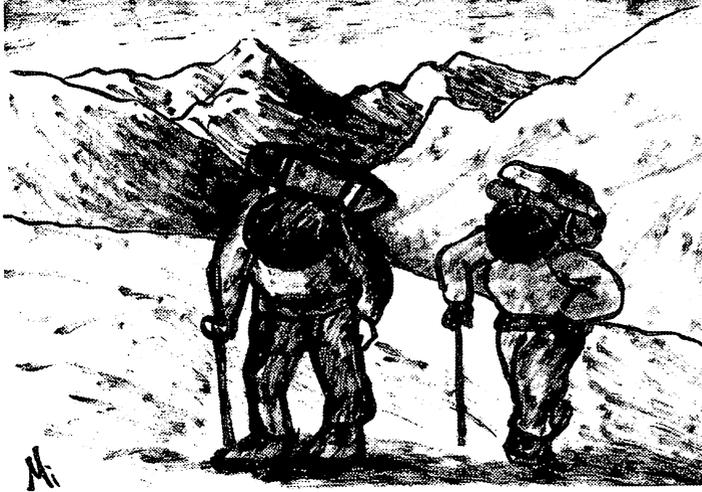
## 晴れのち晴れ 71

### 音楽療法

稲垣 恵雄



# 徒勞



徒勞ほど人に虚しく感じさせ、絶望に追い詰めるものは無いかもしれない。ある強制収容所では、政治犯たちに大きな穴を掘らせ、それが終わると、またその穴を埋め

させるといふ作業を延々と繰り返すそうだが、それも徒勞の残酷な効果を利用したものにちがいない。これに比べたら、大昔に鞭打たれ、巨大な建築物を作らされた奴隷のほうが幸せだっただろう。なぜなら、強制的であったにせよ、自分たちの労苦がなんらかの形として世に残ることを見たからである。

しかし、このような人の望みを奪う徒勞は、決して稀なことではない。むしろ、逆に、私たちの生活は徒勞の連続のように感じることもあるに違いない。

たとえば、この原稿の執筆もそうである。二、三時間ばかり考え込んで、書いてみても、結局はまとまらず、徒勞に終わることがある。この場合は二、三時間の徒勞で済んだのだから、挫折感もそう大きくは無い。しかし、休日の貴重な午後に徒勞で終わらせてしまったとあれば、悔しいかぎりではある。

サロンの

# 絵はがき

5枚1組 ¥180

<サロン・あべの>の活動資金調達にご協力をお願いします。

大学受験のとき、私は一年間、浪人をして結局、現役時代でも充分に入れたような大学にしか行けなかった。当時の私には、その一年間は徒労に他ならなかった。そう考えたとき、私は深い空虚感を味わった。いまでは、そんなことを徒労だとは考えていない。ただし、それは、その一年間もそれなりに充実していたと考え直したというより、一年間の徒労など長い人生の流れの中では大きなことではないと気づいたからである。たとえば、何十年にもわたって働きながら、すべての財産を失う人もいる。家庭を不和のうちに失うことがあれば、その思いも長い徒労として映るかもしれない。すでに亡くなった人の長い闘病生活も、周囲の人々には苦痛に満ちた徒労に思えることがある。

いや、それよりも人はいずれ皆、死んでしまふのだから、人生そのものが徒労なのだという極論もある。どんなに財産を築いても、この世を離れるときにはすべてを捨てなければいけない。とすれば、それを獲得するために費やしてきた労力は無駄だっ

たはずである。子や孫や、あるいは自分の愛する者がそれを引き継げばいいという考えもあるが、残念ながら、世に永遠というものはない。親族もいつかは絶えるだろうし、そうではなくても、人類も生物の種の一つであるのなら、滅ぶときが必ず来るのである。

とはいえ、そんな理屈からすべてを徒労と考えられるほど、多くの人は理性的ではない。山を歩いて頂上まで登れば、そこからの美しい光景に報われたことを感じるだろう。誰かに手を差し出し、「ありがとう」と言われて、それだけで満たされた気持ちになることもある。小さなことで徒労の感覚は無くなることも事実である。

ともあれ、どんな境遇であつても私たちは生きていかなければいけない。それは、全ては無駄ではないか、徒労に終わるのではないかという果てることのない疑念に抗していくことでもある。そこでは希望こそ、私たちの行方を照らす光になるだろう。

ありがとうございました。

カンパ、切手・お茶・お菓子・輪ゴム・さん亭用品の寄贈、また、サロングッズのお買い上げなど、ありがとうございました。

有野千代乃、池田多喜子、伊藤、稲垣恵雄、井上礼子、浦野清美、大賀由佳、大北清子、大阪義肢装具センター・石原栄、太田博、風智恵子、木村節子、蔵田均、黒瀬和子、河野勝行、近藤千枝子、西面壮一、阪口悦子、関幸子、杉山蔦枝、瀬尾洋美、高尾澄男、竹村定子、田中美佐保、田中美智子、辻本浩江、辻本輝子、出口正敏、中村宣子、並松由利子、西川和代、表谷恵美子、藤井さゆり、宝示愛子、牧口美世、松田峯子、丸山寿美子、宮崎徹朗、村田能子、森公子、八木千代、柳生幸子、倭英司、山根匡子、吉原和郎、芳村和子、その他の方々。(敬称略)

赤松 昭

# 「谷間」に 「くだわり」続けて

3

―注目され始めた「高次脳機能障害」―

日本では年間に約12万人あまりの人が交通事故で頭部にケガをし、その他の事故や病気も含めると、毎年膨大な数の人が脳にダメージを受けています。このうち、身体の傷害が回復したにもかかわらず、高次脳機能障害と呼ばれる障害を抱える人たちの存在が最近クローズアップされるようになりました。

この障害を簡単に説明すれば、「脳損傷の結果もたらされた中枢神経の機能の低下・喪失のため、社会生活を送る上で大変な困難を抱える障害」だと言います。その障害の表れ方は様々で

すが、多くの人に「記憶障害」が現れます。それまで難なくこなしていた仕事の手順が分からない、駅から歩いて5分の我が家への道順を何年経つても覚えられない、歯の磨き方を忘れてしまった、さらには一緒に暮らしている自分の母親の存在さえ記憶できない方がいます。ただ、外見はどこにも障害があるようには見え

ず、またこうした障害が自分にあることを全く自覚できない方も多いため、トラブルに巻き込まれることも度々です。ある方は自分の自転車に乗っていないがそれを警官に咎められ(記憶障害があるためにどこで買ったかを説明できない)、挙げ句に窃盗犯扱いされて、本人・家族共ども大変悔しい思いをされたこともありま

す。そのうえ事態をより一層に困難にしているのは、医療・保健・福祉にかかわる専門職の高次脳機能障害に対する認識が不十分だということです。そのため、事故後の本人の変わり様を医師に訴えても、「気にしすぎ」「そのうち良くなる」という曖昧な返事や、ひどい場合は「そんなにまでして保険金が欲しいのか」と罵られたケースもあつたそうです。こうした専門職の認識不足のため、家族が本人をその障害もるとも

抱え込んでしまう「社会的孤立」が、その精神的疲労感をより一層強めるケースも稀ではないのです。

ここ数年、全国各地で当事者組織が誕生し、行政に対して施策充実の働きかけを行ってきた。こうした運動によって国の「高次脳機能障害支援モデル事業」が始まり、当事者を支えるシステムの構築が検討されることとなりました。ただ、障害者福祉施策の中でその認定をどうするか、という課題を初め多くの問題が未だ残されており、制度の谷間におかれた高次脳機能障害者への支援策の本格的な整備はまだこれからと言えるでしょう。

サロンの

## 一筆箋

一冊一〇〇枚綴 一五〇円

# 美智子のこんな話

岸田美智子

大阪府オールラウンド交渉に参加して

毎年、暑いこの時期になると障大連（障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議）主催の大阪府に対するオールラウンド交渉が行われます。

当日は大阪府下の作業所やグループホーム、自立生活支援センターなどの約300人を超える障害者団体の関係者が集まって介護の問題、住宅の問題、グループホームの問題、公共交通の問題、教育の問題など、あらゆる分野の交渉が行われます。

今年も7月30日にこのオールラウンド交渉があり、私も参加してきました。いつも思うことですが、大阪府の役割はいつたいなんなのかと、とても疑問に思ってしまう。支援費制度について起こっている問題がいろいろありま

す。八尾市では支援費の上限を設けているのはもちろんですが、お風呂なども週に2回しか認めないそうです。なんとということでしょう。暑いこの時期に毎

日でも必要ではないでしょうか。また、高槻では支援費の移動介護では、社会参加としては1カ月たったの36時間しか認めないそうです。通院などの外出ならば、もう少し多く70時間ぐらいまでは使えるそうですが・・・。

他にも介助者派遣事業所が1カ所ぐらいしかない市もあるそうです。このような現実を大阪府はほとんど知らない状態です。また、知的障害児の場合、移動介護についてはBランクだと対象外で利用できないように制限している市もあります。

支援費制度の理念は障害者、一人ひとりに必要な量だけ支給し、そして障害者の自己選択、自己決定を保障するものであったはずですが。この理念はいつたいどこにいったのでしょうか。

この日の参加者の多くが市町村においてはそれぞれ上限をはっきり設けているところが多く

あると報告されてきました。大阪府の対応としては目安は設けているが決して上限ではないと言いつつていました。この目安と上限の認識の違いはどうして生まれてくるのか、大阪府はもう少し市町村の実態を把握するべきだと思えます。この日も「実態を把握せよ」と、かなりもめましたが、大阪府は態度を変えようとせず、運営向上委員会で議論しているので、そこから出てくる案を待つてほしいと繰り返し返すありさまでした。当事者の声を抜きにした向上委員会から出てくる案はいつたいどのようなものなのか、非常に危険を感じます。とりあえず、至急に支援費の実態把握について障大連との協議の場を持つことでこの日は終わりましたが、このような事をやっている間に、支援費制度そのものが介護保険に統合されてしまう危険性もあるなあとつくづく実感した1日でした。

とにかく今こそ当事者の私たちがますます声を上げていかなければならないのではないのでしょうか。

○MY-DOO(まいどく)岸田美智子

〒558-0002

大阪市住吉区長居西1-9-12(キミハウス1F)

電話06-6609-3133



SALOON

随組ニュース

■「サロン淀川」9月の出会い

日時：9月4日(土)午後12時～4時30分  
内容：今年も淀川区民まつりに参加  
～たこ焼きコーナーやふれ愛の場で、  
手作りおもちゃ、アートバルーンで遊び  
ましょう。サロンの仲間と楽しい1日を  
過ごしませんか～

会費：なし  
場所：淀川区民センター・グランド  
大阪市淀川区野中南2-1-5

問い合わせ先：淀川区社協(ボランティア・ビュー  
ロー) ☎06-6394-2900  
E-mail: sorajii@iris.eonet.ne.jp

■「サロン・にし」9月の出会い

日時：9月11日(土)午後1時30分～4時  
内容：みんなで、手話の指文字を学ぼう！  
場所：西区在宅サービスセンター6階  
ボランティア・ビューロー室  
大阪市西区新町4-5-14(西区役所隣)  
地下鉄=西長堀駅4-A号出口からすぐ  
市バス=地下鉄西長堀駅からすぐ  
☎06-6539-8075

会費：なし  
問い合わせ先：関口 ☎090-4281-5641

■「サロン・ひらの」9月の出会い

日時：9月25日(土)午後12時～  
内容：アミティ舞洲の見学

会費：4000円  
問い合わせ先：ひらのボランティアルーム  
大西 ☎06-6795-2525

■「サロン・にしよど」9月の出会い

日時：9月25日(土)午前中  
集合時間と集合場所はお申し込みの時に  
お問い合わせください  
内容：阿倍野防災センター見学会  
場所：大阪市阿倍野区阿倍野筋3-13-23  
☎06-6643-1031  
会費：なし(交通費など必要な費用はご負担  
ください)  
問い合わせ先：中本勝也  
☎090-9864-9678

■「ウイズ東淀川」9月の出会い

日時：9月12日(日)午後1時30分～4時  
内容：ジャズと童話  
～森永ヒ素ミルク被害者脳性マヒで肢体  
障害者の生活。音楽・執筆活動と福祉教  
育など、多岐にわたる話題を提供～  
パネラー：堀北純生氏  
(著書=子猫とトランペット吹き)  
会費：なし  
場所：東淀川区民会館4階  
問い合わせ先：森田真千子  
☎・FAX 06-6340-8038

■「サロン・いたみ」9月の出会い

日時：9月11日(土)午後2時～3時  
内容：ふれあいコンサート・日本のうた  
合唱：尼崎グリーンエコー  
会費：なし  
場所：伸幸苑(伊丹市寺本6-150)  
問い合わせ先：高原 ☎072-772-3852

<サロン・あべの>VOL.218 発行：平成16(2004)年8月21日 定価¥100  
編集人：<サロン・あべの>運営委員会 表題：中西利香・筆 文中イラスト：石田美禰子  
事務局：〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26 富田慶子方<サロン・あべの>  
TEL・FAX 06-6691-1028 郵便振替口座：サロン・あべの 00950-9-26941  
印刷：セルフ社 〒546-0044 東住吉区北田辺町4-23-2 ミスターDビル2F TEL06-6719-8212  
本紙はホームページでもお読みいただけます。書庫は、<http://pweb.sophia.ac.jp/~t-oka/salon/>